

小さな命を見つめて

高柳 芳恵

継続して一つの生きものをみることでおもしろいことはありません。樹でも草でも昆虫でも、時間をかけていねいに観察していると、思わぬ発見があり、心ときめくことが多いものです。これまでいろいろな昆虫を卵から成虫になるまで育てたり、種から植物を育てたりしてきましたが、そのたびに、どの本にものっていない、親しくなったものだけに、見せてくれる姿に出会いました。それが嬉しくて、野山の生きものを育ててきました。そして、親しみをもつ生きものがたくさんできればできるほど、

“自然との一体感”が感じられ、自然を身近に感じ、そして大切に思うようになりました。ところで、昆虫などの生きものを、室内と同じように、自然の中でじっくりと継続して観察しようとしたら、大変なことです。でも、もし、自然の中で何か月か同じ所において、いつでも会える昆虫がいたら。そして、遠くに出かけなくてもいいとしたら……。そんな生きものに出逢って、十年。“冬を生きる蝶”を通して心の中に育っていったもの、それは“命をみつめる眼”でした。



▲葉の裏で冬越しをする蝶
“ウラギンシンジミ”

その蝶の名はウラギンシンジミ。モンシロチョウより少し小さく、その名のとおり羽の裏が銀色をしています。成虫のまま冬を越す数少ない蝶の一つで、不思議なことに、風雨にさらされたまま葉の裏で冬越しをします。そのため、春まで生き残れるのは、ほんの数パーセント。力尽きて落下したり、葉に止まったまま死んでいたり、鳥に食べられたりと、まるで死亡確認調査のようで、自然の厳しさをひしひしと感します。雑木林の他に、住宅地や公園、緑地など町中の常緑樹にもいるので、案外人目につきや

すいのですが、ほとんど知られていません。

最初の年は、小学三年生の娘と一緒に観察しました。十二月から約四か月、雨の日も、風の日も、雪の日も通いました。羽についた水滴が凍りつきそうに寒い日もありました。十五匹ほど見つけたものの、次々いなくなり、「昨日までいたのに」とがっかりする娘。遠くから葉間に銀色がチラッと見えると、うれしくて思わず顔を見合せてしまいます。春も近いある晴れた日、たった一匹残ったウラギンに太陽があたり、銀色の羽がきらきらと輝いていました。こんなに目立っていいのかしら、と心配する私に、娘が、「ママ、ママ、きいて！」と言ってこんな詩を口ずさみました。

どうしてそんなにきれいななの？

わたしのひかりをあびたから？

それならもっと　こんどから

やさしくしましよ　ひのひかり

「これね、『おひさまからのメッセージ』って題に

するの」。さらりと娘の口からでてきた言葉を味わいつつ、共に小さな命を見つめてこられた幸せをしみじみと感じました。

ウラギンシジミの越冬はこれまで、「葉裏に止まったまま休眠し、なにも食べない」と言われていました。しかし、何年も続けて観察しているうちに、そうではないことに気付きました。ある時、手を近づけてみると羽を動かして威嚇したのです。飛んで逃げることができない蝶の精一杯の抵抗だったのでしょう。また、いつもは四本の脚の爪を葉にしっかりとくこませて止まっているのですが、風が強くとくくと、たandanでいた前脚二本をさっと出して体を支えることも分かりました。また、雨上がり、葉裏にたまってある雨水を、口吻を長く伸ばし、身を持ち出すようにして飲んでいたこともありました。こうした発見が増えるにつれ、ウラギンシジミがとても愛しいものになってきました。一見「静

に見える生き物が、環境に合わせて必死に生きていく力強さをもっていることが感じられ、小さな命がますます重みをもった命となっていました。

また、ウラギンシジミは人間が創り出した環境の中で生きているため、人間の都合で命が左右されるような場面にもたびたび出会いました。開発によって住む場所が根こそぎなくなることもあるし、植木の剪定による犠牲も大きなものでした。農家のモチノキの大木に止まっているウラギンシジミを見に行った時のことです。ぱっさりと枝が切り落とされ、そばで焚き火の煙がもうもうとしていました。ウラギンシジミがいた枝がないとあわてて探すと、地面に落ちています。手のひらにのせると、やがて手のぬくもりで羽を広げました。持ち主の方に蝶を見せて話をしたところ、へえーと驚かれながらも、「息子はもうわしの仕事をひきつがないので、木の手入れをする人もいない。だから思い切って伐らねば大きくなりすぎて困るんだ」と話されました。

観察を始めて七年目、待ちこがれた瞬間がきました。越冬に成功したウラギンシジミの飛び立つ瞬間を見ることができたのです。その蝶を見つけてから百二十四日目、彼岸過ぎの暖かな朝のことでした。胸騒ぎを覚え出かけてみると、それまで羽の間にしまっていた触角を盛んに動かしています。そのうち、頭をぐるぐる回したり、脚を動かしたりし始めました。やがて葉の表側によじ登ろうと脚を葉のへりにかけるのですが、脚が萎えているのか、二、三度失敗します。ようやく葉表に立ったものの、よろける始末。やがてしっかりと立って羽を広げ、太陽で体を温め、エネルギーをもらうと、飛び立っていききました。ふと、主のいなくなった葉をみると、爪の跡が四つ、しっかりとしみになって残っていました。あの小さな脚で厳しい冬を乗り切ったことを考えると、胸がいっぱいになりました。その年の観察ノートには、次のような言葉が残っています。

「十二月三日に発見以来、実に百二十四日間、風に

も、雨にも、雪にも、そして公害にも負けず、頑張り通した慎重派ウラギンに乾杯!! 今冬見つけた四十七匹全てのウラギンがいなくなり、四か月間の調査が終わった。越冬調査とは、死亡調査のようなもの。数え切れないほどの「死」に直面してきた。昨年は、葉に脚を一本残したまま力尽きて葉から落ちていくのを目撃した。友人が言った。『あなた、よく直視できるわね』と。しかし、苛酷な冬から逃げずに、能動的に生きていくウラギンの力強さに惹かれている私、また、春元気に飛ぶ姿を見て命が引き継がれたことに安堵している私、そして、ウラギンから生きるエネルギーをもらってきた私を、私自身が知っている」。

ところが、翌年のことです。越冬成功したウラギンシジミが飛び立った瞬間、ヒヨドリが降りたって、さっとくわえていってしまったのです。目の前で起きた一瞬の出来事にぼうぜんとりました。生

への旅立ちの**はずが**、死への旅立ちとなるなんて、涙がこぼれました。この出来事も自然の営みだとわかっていても……。

このように一つの生きものを見続けて、十年。なぜそんなに惹かれるのと聞かれることがあります。

魚の育成について

魚の種類は地球上で約二万種以上あり、産卵方法は、卵を産んでそのまま面倒を見ないというのが多

その時には迷わず、「ひと冬、ウラギンシジミを見守り続けてみて」と答えます。

これからも、ウラギンシジミの観察は続けていくつもりですが、さらに、十年後、どんな思いが育つていくのでしょうか。

(多摩丘陵野外博物館員)

石塚 治男

いですが、親が卵の面倒を見る種類もあります。

安産のお守りとして知られているタツノオトシゴ